



第29号

発行所 大阪市史跡 龍溪禪師墓所  
 霊亀山 九島 禅院  
 〒550-0022大阪市西区本田3丁目4-18  
 ☎06-6583-2725  
 発行人 住職 奥田啓知(智證)

大阪にオリンピックを!

九条に中華街を!

二十一世紀まであと一年!

# 成人式を考える

## おとなになれ新成人

成人式での講演は二度としない。早大教授(エジプト考古学者)吉村作治さんが、仙台市での成人式で、あまりのマナーの悪さに激怒され、予定外の「怒りの宣言」をされました。

新聞などの報道によりますと政令都市・仙台の二十歳の式典には、約九千五百人もの新成人が市体育館に詰めかけました。市職員がハンドマイクで何度も呼びかけ、やっと会場に入ったのは半数以下で、巨大会場はガラガラ、式の進行にお構いなしに入退場を繰り返して、禁止されている携帯電話をかけたりとマナーの悪さが際立っていたとのこと。途中で腹に据えかね「五年前、埼玉の成人式で講演したときは、話ができる状態ではなかった。今もそれに近い。あと何分話せばいいんでしょうか」と激怒。冒頭の「怒りの宣言」をされ予定より十分早く締めくくったそうです。

昔は、男子の成人を「元服(げんぶく)」といいました。元

服の「元」は首(こうべ)で、「服」は冠の意。元服の以前は童(わらべ)と呼ばれて頭頂をあらわにしていた男児に、成年の象徴として冠を加えるのが元服の儀式でした。

元服の年齢は一定せず、十歳ころから十五歳ころまでにするのが一般的でした。早くは三歳や五歳、遅くは十七歳や二十歳の元服もあったそうです。また元服すれば、それまでの童名を改めて実名を名乗り、社会的に一人前となったのです。

「国民の祝日に関する法律」には、一月十五日の成人の日を「大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝い励ます」日だと記されています。今の青年たちに「みずから生き抜こう」なんて気持ちがあるのか、疑問です。また、行政が画的に、成人式を行なう、同窓会がてらにやってくるそんな青年たちに難しい話を聞かせようとするのが、そもそも間違いないでしょう。

自分の主体性を確立するのが



講演する吉村作治教授

「成人」の条件ならば、今のように、満二十歳になれば十羽一絡(から)げで全員を成人にしてしまう成人式ではなく、むかしのように、ばらばらのほうがよいように思います。それぞれの家の事情や、その子どもが成長にあわせて成人させるほうがよいのではないかと。

平安時代には、元服の夜に女子の添伏者(せきふし)と同衾(せきん)する風習があり、江戸の庶民のあいだでも、元服した者が先輩に連れられて妓楼(きろう)に遊びにいったそうです。その重要な部分の欠落した現在の成人式は、彼らにとっても、気の抜けたビールに等しいし、世界各国の成年にある兵役の義務が、日本の若者にはないのも若者を「成人(おとな)」にさせない原因かもしれない。憲法上できないなら、兵役の義務に代わる、平和国家にふさわしい社会奉仕の義務を課せることを考えるべきだと思います。

